

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 林 初梅

論文題目 台湾における郷土教育思潮とアイデンティティ形成
——郷土観・歴史観・言語観の模索——

論文審査委員 松永 正義教授、安田 敏朗准教授、岩月 純一准教授

1 本論文の構成

本論文は台湾における郷土教育について、90年代のそれを中心としつつ現在に至る郷土教育の形成、展開の過程を歴史的にたどり、これを台湾におけるナショナル・アイデンティティの形成という視点から論じようとするものである。本論文は以下のように構成される。

序 章 問題意識・研究の視角：台湾郷土教育思潮研究の視点

第Ⅰ部 記憶の中の郷土教育—台湾における郷土教育の系譜

第1章 植民地台湾の郷土教育の再考—1990年代の郷土教育との接点—

第2章 中（華民）国化教育時期における郷土教育の諸相（1945—1990年） —
郷土教育の中断期としての位置づけ—

第Ⅱ部 今日の郷土教育形成の場

第3章 知識人による本土化理論の模索（1970年代—1990年代） —「郷
土」という概念の形成過程—

第4章 郷土教育教科設置への胎動（1990—1994）

第Ⅲ部 郷土科時代の展開（1994—2000）

第5章 郷土教育の教科設置と教材編集の興り

—新しい教材に見る台湾人アイデンティティの興り

第6章 郷土言語教育推進の困難性

—発音記号の論争に隠された文字観の対立—

第Ⅳ部 九年一貫新課程による郷土教育の新しい展開

第7章 郷土言語教育の必修化と地域の実例

—台北市から見た郷土言語教育の実態—

第8章 九年一貫新課程における社会科歴史教育の登場

—郷土科時代との連続性を問う—

終章 台湾郷土教育思潮の特徴とその意味すること

付録 「教育部推動国民中小学郷土教育実施要点」

2 本論文の概要

本論文は郷土教育の形成、展開過程をほぼ通時的に跡づけるなかから分析しようとする。

序章では、郷土教育の展開を台湾におけるナショナル・アイデンティティーの形成と深く関わるものとして、その視点から分析が加えられることを述べる。

第1章は、日本時代の1930年代に行われた郷土教育における「郷土の認識」「郷土の近代」といった概念が、1990年代の郷土教育とリンクするとする。この時期に作られた教材が90年代の教材作成の素材とされたことで、「郷土の近代」という視点が90年代の郷土教育に影響を与えたという、興味深い指摘をふくむ。

第2章は、国民党時代の郷土教育を取り上げ、50年前後の郷土教育論を中心に、国民党によるそれは、「中国化」を意味していたことが分析される。

以上が第I部である。

第3章は、90年代の郷土教育への直接の前史として、70年代以来の知識人による本土化論の形成と展開のなかに「郷土」概念の形成を跡づける。陳其南による土着化論など、歴史学のなかでの台湾というテーマへの関心の深まりと「台湾化」、文学における「郷土文学」や台湾主体意識の形成、台湾語運動の展開、などを通じて、台湾のアイデンティティーの追求のなかに「郷土」という概念が確立されていくこと、またその中に台湾のエスニック文化の多様性が意識化されていくこと、が論じられる。

第4章は、90年から94年までの郷土教育科目が設置される前夜の時期を扱う。民進党地方首長によって主導された母語教育、郷土教育を契機として、中央政府がこれに突き動かされるようにして郷土教育科目を設置するに至る過程を、立法員における議論などを素材として描く。

以上が第II部である。

第5章は、郷土教育教科設置以降の展開と問題点を明らかにする。本章では郷土教育の行政面での展開と運営の仕組みを丹念に跡づけ、各地での教材の自主的な編纂過程を通して、いわば下から台湾を主体とする歴史、郷土観が形作られていくさまを整理する。『認識台湾』をめぐる論争に見られるように、郷土教育をめぐるイデオロギー的な争点は、統独問題、つまりナショナル・アイデンティティーへと向かうものだったが、教育の現場ではナショナル・アイデンティティーの地点へ踏み込むことを避け、「郷土」という多義的かつ曖昧な概念にとどめつつ、その中で主体としての台湾だけは顕在化されていった、とする指摘は重要である。

第6章は、この時期の「母語教育」のはらんでいた問題点を、表記問題の視点から分析する。TLP A派である洪惟仁と、教会ローマ字派である鄭良偉の台湾語観の分岐を中心に、「郷土言語」の内実に関わるコンセンサスの形成の困難を分析する。

以上が第III部である。

第7章は、2001年以来の九年一貫新カリキュラムのなかでの「郷土言語教育」の実際を、現場での聞き取り調査や、教科書の分析等を通じて叙述する。丹念な聞き取り調査等によりその実態を明らかにした点が、本章の最大の功績だが、同時に、「郷土言語」教育は、一方で「国語」と並ぶ位置に位置づけられ、各エスニック集団の言語の地位は格段に高まったが、しかし、教育

そのものは理念先行で、教育を支える体制はまだ不十分であり、教育目的もイデオロギーの現場に踏み込まない分だけ曖昧なままに残されていることも、その叙述からうかがえる。

第8章は、新カリキュラムのなかでの社会科、歴史教育が取り上げられる。ここでは言語とは異なり、独立した科目としてでなく社会科そのものが「本土化」されたわけだが、その教科書の分析によって、そこに見られる歴史観は基本的に『認識台湾』のそれを引き継ぐものとされる。

以上が第IV部である。

最後に終章に於いて、こうした郷土教育のなかで確立されてきた台湾を主体とする教育は、やがてはナショナル・アイデンティティーの形成につながっていくものだが、しかしそのアイデンティティーは台湾における各エスニック集団をふくむ多元的なアイデンティティーとなるはずだと結論される。

3 本論文の成果と問題点

本論文の功績はつぎの3点であろう。

第1に、中央政府によって統轄しきれず、地方の独自性が強いいため、教育の個々の現場によって様子が異なり、なかなか統一的に把握できないこの問題を、丹念な聞き取り調査と、資料収集によって、実態を明らかにしたこと、さらにそれを一貫した叙述の下に歴史的に明らかにした点である。この問題はさまざまに語られてきているが、一貫した叙述の下に論じたのは、本論文をもって嚆矢とするものと思われる。

第2に、上記のことと関わるが、郷土教育の問題を中央のイデオロギーレベルの問題としてだけでなく、教育の現場の問題としてもとらえた点である。この問題は文化的ヘゲモニーの問題として容易にイデオロギー化する問題だが、教育の現場ではそうしたイデオロギー化を避けようとする力学が働いており、その双方を視野に入れることで分析が立体的、かつ客観的なものとなっている。こうしたことは丹念な聞き取り調査抜きには達成できなかったものと思われる。

第3に、郷土教育の問題は、中央では恒に文化的ヘゲモニーを争うイデオロギー問題だったが、教育の現場ではむしろナショナル・アイデンティティーの問題に踏み込まないために、「郷土」という概念は、多義的かつ曖昧なままにとどめられていたという指摘は、重要だろう。そうした曖昧さは、中央の政争とは別の場で緩やかな合意形成が行われることを保証するものであるように考えられる。

本論文は聞き取り調査のみならず、資料収集においても大きな努力が払われており、とりわけここに集められた教科書は、個々の現場を回らなければ手に入らないものであり、そうした努力が本論文の叙述を支えているものである。

しかしながら本論文にも問題がないわけではない。それはおよそつぎの4点である。

第1に、中央レベルの過程の分析にやや手薄の点が認められること。とりわけ李登輝に主導された国民党自身の本土化が、この問題に関わっているものと考えられるが、そうした点にほとんど触れられていないのは問題だろう。

第2に、第1章で扱われた日本時代の郷土教育が、教材のレベルを超えて「郷土」の概念にまで影響を残したとするのは、問題ではないか。この叙述に集約的に表れているのだが、分析対象としての「郷土」と分析概念としての「郷土」が峻別されていないことが、概念の混乱を招き、叙述をわかりにくくしているのは残念である。

第3に、50年代の国民党による郷土教育の分析について、大陸時代との関わりに触れられていないのは残念だ。この時期の国民党支配は、大陸時代を引き継いでの国民国家建設という側面と、台湾におけるエスニックな支配の確立という側面との二重性を持っていたと考えられるので、その一方だけを見るのはやや問題ではないか。

第4に、『認識台湾』をめぐる論争が大きなものだっただけに、そこでの争点が、新カリキュラムの教科書でどう引き継がれたか、または引き継がれなかったかについて、もう少しつつこんだ分析がほしかった。これは先に述べた緩やかな合意形成と関わるという点で、重要だと思われる。

しかしながらこれらの点はいわば望蜀の言であり、全体としては本論文は完成度の高い好論文だと言える。

以上のことから審査委員一同は、本論文が独創性に富むすぐれた論文であると認め、一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終試験結果要旨

2007年6月13日

受験者 林初梅

最終試験委員 松永正義 安田敏朗 岩月純一

2007年5月24日、学位請求論文提出者林初梅氏の論文及び関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定めるところの最終試験を実施した。

試験においては、提出論文『台湾における郷土教育思潮とアイデンティティ形成——郷土観・歴史観・言語観の模索——』に関する問題点及び関連分野について質疑を行い、説明を求めたのに対して、林初梅氏は適切な説明を以て応えた。

よって審査委員一同は、林初梅氏が学位を授与されるに必要な研究業績及び学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。